

第10回気象学史研究会「気候変動解明への歴史からのアプローチ」 開催のお知らせ

気象学史研究連絡会

第10回気象学史研究会を2021年度秋季大会に合わせ、下記の要領でオンライン開催いたします。

後援：日本科学史学会東海支部

日時：2021年12月2日（木）18：00～20：00（秋季大会第1日夜）

形式：オンライン（リアルタイム形式）

テーマ：気候変動解明への歴史からのアプローチ

趣旨：2021年8月、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の第6次評価報告書（第1作業部会）「自然科学的根拠」が公表され、気候システムや古気候的証拠への関心が高まりを見せている。本研究会では気候変動と歴史の関係を主題とし、①大気研究により過去に異常気象が起きたシステムを解明するとともに、②最新の高精度古気候復元から明らかになった過去の寒暖や乾湿の気候変動の状況を紹介する。さらに、気候変動に対して日本社会がいかに対応してきたのかも議論する。こうした過去の気候変動解明は、未来への展望を考える上でも唆に富むだろう。

本会合は気象学史研究に関心を持つ、より多くの方の間の情報・意見交換をうながすため、学会員以外の方にも広く参加を呼びかけて開催する。

招待コンピナー・司会：財部香枝（中部大学）

プログラム：

1. 昭和20年（19年から20年）の異常気象について
立花義裕（三重大学）

気象学は、異常気象や気象災害、そして戦争をきっかけとして大きく発展したことは周知であろう。災害級の気象現象は自然現象であるからその発生は避けられないが、後者は「社会現象」であり、人類に英知が備われば回避可能であろう。尤も、地球温暖化に因る前者の発生は英知度に依存するが・・本発表では昭和

初頭から太平洋戦争終焉時までの日本の気象・気候状況を通覧しつつ、戦争終焉直前の冬（1944-45年冬期）の観測史上最大級の豪雪と寒波、およびそれに引き続く夏（1945年夏期）の観測史上最大級の冷夏に焦点を当て、これら異常気象と当時の社会と政治状況の連関について論考する。気候危機時代の温故知新の一助となればとの思いから。

2. 高時間分解能での古気候復元による新たな可能性
中塚 武（名古屋大学）

最近、樹木年輪に含まれるセルロースの酸素同位体比から、相対湿度や降水同位体比を介して、夏の降水量の変動を復元する研究が進展している。セルロースの酸素同位体比は現生木から遺跡出土材まであらゆる木材を対象に測定できるので、既に中部日本では、21世紀の現在から弥生時代まで2500年以上の精度の高い年単位のデータが得られている。21世紀の現在のデータには、近年の水害の増大につながる高温かつ湿潤な状況が反映されているが、同じような状況は、12世紀の平安末期、14世紀の鎌倉末期にも見られ、年輪データに見られる過去の気候変動の一部始終から、近未来の気候変化と社会影響を予測できる可能性もある。その最新の情報を紹介する。

参加方法：

参加は無料です。参加を希望される方は事前申し込みをお願いいたします。申し込み方法等は気象学史研究連絡会ウェブサイト（下記）に掲載いたします。

<https://sites.google.com/site/meteorolhistoryjp/>

お問い合わせ：

上記ウェブサイトの問い合わせフォームをご利用ください。

山本 哲（研究連絡会世話人・元気象研究所）